The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	生命力と合理性の間 : ジョルジュ・カンギレムの『正常と病理』を巡る考察
Author(s)	橘, 真一
Citation	年報人間科学. 2011, 32, p. 207-219
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9286
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈翻訳〉

生命力と合理性の間——ジョルジュ・カンギレムの『正常と病理』を巡る考察

ポール＝アントワーヌ・ミケル 著
／橘 真一 訳

序論

§1-1943年の医学博士論文のなかでカンギレムは次のように書き記している。

（1）「哲学はすべての未知の素材は善であるとする反省である。そしてわれわれは喜んで、すべての善い素材というものは反省に対して未知でなければならないと言う。」とてもフランス的なこの言回しにおいて何より驚くべきことと思われるのは、「反省」という言葉の使用と、同時にそれが示している修辞学的転倒である。まず最初に反省〔という言葉〕によって、「反省の概念」あるいはカントの言う「反省的判断」とはまったく別のものが問題になっている。われわれはカントが哲学的思考の「分野」と「地域」と「領域」とを区分したことを知っている。そして、哲学的思考はたとえ哲学的思考が立法不可能なところに打ち立てられても、何らかの領域、自らに固有の対象である分野を常に必要とすると、彼がはっきり言っていることをも知っている（*Critique de la Faculté de Juger*, Introduction, 3）。われわれがフッサールにおいて再び見いだすのは、自然的態度の宙づりによって哲学にとっての「絶対的認識の場」を引き出す要請である。それゆえわれわれが「純粋所与性（*reine Gegebenheiten*）」とその志向的相関物が出現するのをみるだろう内部における、純粋な視（*reines Schauen*）の場が問題になるだろう（*Idée de la phénoménologie*, 173）。カンギレムにおいてはまったくそうではない。というのも哲学の対象ははじめは非哲学的な存在者として考えられているからである。われわれは喜んで次のように付け加えよう。すな

わち、哲学はだからまず初めは自分のものではなかった分野の上に、ある領域を築かなければならない。その歩みは非基礎づけ的である。哲学は自らの対象を問う他の学問の実証的能動性を問うというやり方を通してしか対象をしっかり把捉できない。哲学はこのようにあらゆる形式の超越論的アプローチを拒否することによって特徴づけられる。

§2 - しかしそれならば何が単純な「メタ理論的」反省から哲学を区分するのだろうか？単純な反省は科学の諸概念を明確にすることを任務とし、かつ科学が提出する記述もしくは説明の型と諸対象を活用することを任務とするというのに。カンギレム自身が彼の著作の第二頁において書いていなかっただろうか？彼は「形而上学を組み込んで医学を改革しようなどという自惚れ」は持ち合わせていないと。もっともわれわれはこの〔論述の〕第一文目からしてすでにその自惚れを目にしているのである。すなわち、哲学にとって「善い素材」があり、それは哲学に未知で「なければならない」。したがって、哲学の対象においてのみならず、哲学的反省それ自体においても、規範的な何ものかがあるのであり、単に記述的な何ものかがあるのではない。われわれの見解では、ここに彼の思想における第一の注目すべき点がある。一方では哲学はただちに自身から生じたりはしない。哲学は自律的ではない。だが〔他方〕、哲学の使命はもっぱら科学の諸概念を解明することにあるのでもありえない。さもなければ如何にして哲学は「実際は規範的活動である」（『正常と病理』〔以下NPと略記。数字は原著の頁数〕, 77）、「生命」をついに対象とすることができるのだろうか？われわれは急いで次のことを明確にしておこう。つまり、この著作のなかで著者によって目ざされていたのは、単に「人間的意識」の非同一性のみではなく、したがってまさに「それ自身に対する生命の非同一性」(NP, 49)なのだということを。この点は後述する。ここでもう一度言うが、そのプロジェクトは、科学の説明に対して、意識の経験領域への直接的到達を対立させることではない。

§3 - しかしながら、そこから以下のことを結論しようとしたくなるだろう。つまり、生命の規範性と――「共感的退行によって」(NP, 150)――生命の規範性が人間的意識によって経験される仕方はまったく両方とも科学的説明の場に到達できない、科学的説明の場はそれゆえそこでひとつの領域を構成しえないということである。たしかに、病気はもはや人間の特質ではない。というのも、「犬や蟻にも病気はある」(NP, 150)からである。人間を自然のうちの例外とするどころか、病気はしたがって、ベルクソンのいうように宇宙的存在がないにしても、生態学的でより大きなプロセスに人間を属させる。カンギレム、仮説をつくらず。とはいえ、やはりそこから次のことを結論しなければならないのだろうか？つまり、われわれが一度に生命的なものと、病気と健康の差異とに到達するのは、科学に背を向けることによってであるということを。もしそうだとすると、われわれはなぜフランス哲学にこのような出発点が与えられているのかをもはやあまりよく理解できなくなってしまうだろう。というのも、もし哲学的反省が自らのものではない領野において構成されなければならないと自らを規定するなら、いかにして、もはや

科学の実証性なくして済ますことができるのかということがあまりよくみえなくなる。すなわち、この実証性は、哲学に対して自己に対する本質的な異質性と、自己に対する絶え間ない不一致を保証するのである。フランスの医師かつ哲学者〔であるカンギレム〕の思想の注目すべき第二の点が存するのはその点である。それはまた争点（緊張が生じる点 point de tension）でもある。規範的なものと事実的なものを対立させなければならないのだろうか？動物と人間の生命の規範性と、生物学的医学によって研究されてきた生物の事象性とを対立させなければならないのだろうか？「イエス」とこのテクストからの多数の引用は告げているように思われるし、われわれはそこに戻ってくるだろう。しかし、われわれはいくつかの事例の分析をとおして、この読解は適切ではないということを示そう。それどころか、緊張は必然的に存続する。カンギレムが引き受ける生命の哲学は決して生物の科学と対立したりはしないし、生物学的水準や医学的水準とも対立しない。生命の哲学は――もしくはとにかく単純に、であっても――科学的合理性に対立する形で成立するわけではないし、いずれにしても対立するだけで成立するわけではない。ベルクソンより明示的な仕方で、カンギレムは一度に生命の哲学者と同時に合理主義的哲学者である。われわれはその理由を説明し、そこから教訓を引き出すことを試みる。

1　「意識の観点から価値のあるもの、それは科学の観点からは価値がない」

§4 - 著者によって提示された第一の論考の第四部は、この観点から見ればまったく模範的である。この部はルリッシュ〔Leriche, 1879-1955：神経外科の先駆者〕の発想を扱っている。「医者〔ルリッシュ〕は健康を、身体について主体が意識を持っていないこと」(NP, 52) と定義しているとしてまず糾弾されることになる。それから次に、そしてまた結局は、「諸器官の沈黙」のうちで「病気の不在において」(NP, 52) 完全なものとなる「生命」として、健康を定義していると糾弾される。病気はしたがってもはや、われわれがそこから得る自覚と必ずしも一致しない。病人の観点や、遂には最も現象学的なものとも一致しない。となると、もし人が生命を定義しようとするなら、「生命を脱人間化し (déshumaniser)」なければならない。生命へ非主観的眼差し、つまり科学的眼差しを向けなければならない。周知のようにカンギレムは、病気は単純な規範ではなく「解釈すべき事実」であるという事実を考慮する必要性を、科学的眼差しに対立させる。臨床医自身は諸「原因」ではなく「症状」を究明しているのである。そして、たとえ癌やエイズがたしかに当初無痛で進行しえるとしても、それらは苦痛の経験を介して結局は病人に知らしめられる。だからそこには一方では、病気に対して実際の影響力をもつ、あらゆる科学的説明や記述を禁じる病気の体験というようなものがないだろうか？ルリッシュは痛みの現象を分析していたとき、彼自身そのことを認めていたのではなかったか？痛みにおいて、そして痛みを介して、もはや単に医者の〔解釈する〕解剖学的病気だけが問題なのではなくなる。痛みは「真正に異常な」(NP, 56) 状態とを構成する。つまり、同時に感情と状態を構成する。痛みはわれわれに何らか

のことをなし、「人間は人間の痛みをつくる」。われわれが苦しむところのものは同時に、苦難以外の何ものでもない。病気とは常に同時にその解釈者を必要とするような規範にほかならないということを結論するために、「抽象科学」と「具体的意識の領域」を対立させてはならないのだろうか？病気はだから専門家や医者にかかわる事柄ではなくなるだろう。実際に体験されている以上、病気は特異的で個体的な一つの歴史になるだろう。病人の観点が内在的観点だからこそ、それはしたがって最も真なるものになろうし、そうすればおそらく学者の説明的で記述的な観点のある種の「中断」によってしか、その観点は得られないだろう。学者の観点は、病人の観点は反対に外在的で象徴的で相対的な観点以外の何ものでもないと結論したくなる。われわれは急いで次のことを付け加えよう。もし、そのようなものが本当にカンギレムの思想の核心なら、彼の医学的人間中心主義は粗暴な批判を受けることになるだろう。医学はおそらく脱人間化しているのだが、その石膏（plâtre）の眼差しは、消毒薬や抗生物質やワクチンの力によって、二〇世紀にはおよそ1000万もの人々の生命を救ったのであろうから。

§5 - したがってそのように説明された諸事実を体験された諸価値に対立させなければならないのだろうか？あるべきものをあるものに対立させなければならないのだろうか？健康は、魂一般の徳（vertu）ではなく、まさしくあなたの魂の徳であると結論しなければならないのだろうか？あなたの魂とは結局、われわれが認識活動の中断によってしか到達できないし、純粋内在の範囲においてしか到達できないような、あなたの意識にほかならないものである。もしその通りなら、著者の思想の本質的な複数の要素は、実のところ不可解になる。まず何よりも、われわれがすでに強調してきたように、病気は人間を例外にしてはくれない。例外とは、病気にかかるその他の自然種の全て、たとえば樹木や犬や蟻の上位につけられるような例外のことであるが。こうした否定性（négativité）、こうした〔病気への〕焦点化（polarisation）は生物に固有である。ところで、生物は人間ではない。われわれはベルクソンのように、常にわれわれにおいてそれを思い出そうと試みることができる。しかしそうしてわれわれが思い出すようなわれわれだけではもはやない。われわれがのっとっているのは「われわれ」の観点ではなく、反対に、われわれを宇宙のなかのイマージュ（image）にする観点なのである。すなわち、生命的なものの観点である。カンギレムは常時そのことを強調している。たとえば淘汰や適応への問いを巡ってテシエ〔Georges Teissier, 1900-72〕やラモット〔Maxime Lamotte, 1920-2007〕による個体群の遺伝学における著作をその点に関して援用してみせている。生命的規範性は何よりもまず、そして第一に生物学的意味をもっているのである。生命的規範性とは次のことを意味している。すなわち、シャクガ〔鱗翅（りんし）目シャクガ科昆虫総称〕の色素形成変化を引き起こす遺伝的突然変異が、ビクトリア朝イギリスの歴史的で生態学的な文脈によって淘汰されるだろうということを意味している。ちなみにビクトリア朝イギリスは工場道で煙によって幹が灰色がかって黒ずんだカバノキ〔シラカバなどの総称〕を生産していたのであった。生物は生物学に対して無関心ではありえない。われわれはこの〔シャクガの〕例の深遠な意味をあとでみる

ことになる。この例は、遺伝学における分散や平均といった統計学的な概念の使用を促している。しかし生物学的突然変異はすでに単なる開きとは別のものである。単なる異常や確率的偏差とも別のものである。1966年の論考において、カンギレムは、やはりこのテーマについてレルナー〔Israel Michael Lerner, 1910-1977〕とホールデーン〔John Burdon Sanderson Haldane, 1892-1964〕に言及している（NP, 248-249）。実のところ、淘汰のプロセスは突然変異をもたらす生体の数が増えることを進行させる。増加のプロセスを起こす複雑な機構の正確な理解はほとんど重要ではない。そのプロセスが存在するという単純な事実はもはやまさしく、すでに単に事実の秩序にあるのではなく、まったく価値の秩序にあるのである。

§6 - 今や、著者が提示している「病気」と「健康」の概念の批判的検討に立ち戻ろう。われわれを驚かせるのは、そこでは確実に「正常で」「規範的な」「人間」（NP, 87）が単に問題になっているのではないことである。第一に、まず何よりも、まさしく「生命の動的極性」（NP, 85）がそこにある。より注意深くこの点を検討してみよう。もし「われわれ」の観点がなかったとしたら、それは――極言すれば――生物の科学と完全に相いれるだろう。そして、著者自身は〔『正常と病理』原著〕第149頁で「生命は科学の対象となる」と結論づけている。この観点は後のテクストにおいてこそ顕著になっていくだろう。生命的なものの安定性は、発生遺伝という旧来の概念と、DNAやRNAの高分子特性の発見との間の分節によって保証されている（「概念と生命」、1965〔1966〕）。生命的なものの安定性は「遺伝情報の」概念に対して彼の思想の中心的役割を請け負うだろう。なぜその時、次のように思い浮かべないのだろうか？すなわち、もし病気が「われわれによって」一つの価値として体験されるのだとしたら、そしてもし健康がわれわれにとってまさしく「一つの規範」であるのだとしたら、それは意識の観点からは人間の最終的な縄張りなのであり、そこに科学は入り込むことができないだろう、と。まず初めに1965年に、そして進化生物学者マイヤー〔Ernst Walter Mayr, 1904-2005〕によって同時期に支持されていた立場に従って、たとえカンギレムが遺伝情報に、細胞構築やさらには多細胞生物の発生をも理解するための本質的な役割をみていたとしても、遺伝情報は、「本質的に偶然」にとどまるゆえに、「概念に」対立しなければならない、進化という事象それ自体をまったく説明できない。しかし、たとえ1943年のテクストに立ち返ったとしても、この読解は弁護の余地がない。実際、著者は何と言っていたのだろうか？

（2）「生命は生命がそこで可能になる諸条件と無関係ではない。生命は極性であり、そのこと自体で価値の無意識的定立であり、要するに生命は事実において規範的行為である。規範的ということで哲学においては、一つの規範に比して事実〔事象〕を評価もしくは形容する判断のすべてを意味する。しかし、このような判断は、結局は諸規範を創設する（instituer）判断に従属している。語の完全な意味において、規範的とは諸規範を創設するもののことである。そして、われわれが生物学的規範性と言おうとしていることとは、この意味においてのことである。」（NP,

17) 彼の最初の著作からすでに、カンギレムはフランスの主知主義的で観念論的な哲学と断固として対決している。彼はすぐさまアランと距離をとっている。このことはジャン＝フランソワ・ブロンステン〔Jean-François Braunstein〕が最近示した。彼〔カンギレム〕にとって単に諸事実と諸価値の間の対立にとどまることのみが重要なわけではない。この対立は、人間的意識はもはや自然的現象の世界ではない意識固有の世界にある、と思わせるような何らかの対立である。規範性はだから何らかの規範的でアプリオリな判断の特性ではありえないだろう。つまり諸現象の自然性から離在する実体的な形而上学的主体の特性ではありえないだろう。そして規範性がそのようなものではないのは、〔次の〕文章に見られるような中心的な理由のせいである。規範性は単なる体験された特性などではなく、まさしく生命それ自体の特徴なのである。規範性は意識的活動ではなく、意識的活動がそこから生じるところの「価値の無意識的定立」なのである。今やもはや自然現象を中断することは問題ではない。理性や意識の行為によって自然的諸現象の現前を消去することも問題ではない。反対にここでは、自然現象を実在へと導かなくてはならない。もはや「体験すること（*erleben*）」ばかり守って、「生きていること（*leben*）」を消去してはならない。何よりもまず、逆に「体験すること（*erleben*）」から「生きていること（*leben*）」へ転回しなければならないが、それはあわてて以下のことをつけ足せばこそのことである。すなわち、まさしくその生命が規範的である以上、生き生きとした諸現象の全体が生命それ自体というわけではないのである。したがって、この言葉が形而上学的地位を有していることは明らかである。この言葉が関係しているのは、物理学的なものから生物学的なものへという分節において、単純な諸事実〔事象〕に属するものではなく、まさにわれわれの世界観に属するものなのである。

§7 - 今はただちに、ベルクソンの通った航跡でどのようにカンギレムが規範性について考えていたのかをみてみることにしよう。こうした思想はベルクソン的生命プロセスを召喚する。もっとも、ベルクソンはそのプロセスを際だたせたりはできなかったのだが。実際、生命は病気を呼び起こすのである。

（3）「神経謬腫（こうしゅ）という病気の例は以下のような考えを例示するにあたって申し分なく適合しているようにみえる。すなわち、病気は単に生理学的な秩序〔正常状態〕の消滅であるだけではなく、新たな生命的秩序や理念等の現出でもある。その現出は、当然のこととして無秩序についてのベルクソンの理論を根拠にすることができるだろう。無秩序などない。あるのは、何の足しにもならないあるいは苦しまなければならないような他の秩序が、待ち望まれていたあるいは愛されている秩序に置き換わることである。」(NP, 128) したがって生命は単に操作的定義の対象となるだけではない。というのも、規範的なものは規範の「創設（institution）」であるからである。そして規範的なものが自己との「非同一性」のうちにもあるのはこのような理由からである。(NP, 49) 生命は最終的に決して無ではない。しかし、われわれはここでその本質的な理由に気づく。それは、規範の存在が決して規範の作動に一致しないからというだけで

はなく、規範的なものが自分自身に対して常に余剰を持つからでもある。のみならず、もし規範的なものがそのようなものでありうるなら、それは病気が生命に対して単なる偶発事（*accident*）を構成するだけではないからである。生命の反対は単純な対立物ではなく、まさに同時に、生命的なものの自己への不一致を保証する、矛盾（*un contradictoire*）でもある。生命でないものは、したがって生命の一部をなす。そうしてわれわれは健康でありえるために病気にかからなければならない。

健康はもはや病気の不在ではなく、病気がとりうるあらゆる形態のもとで病気を乗りこえる能力である。生命の反対はだから何ものでもないわけではない。それは否定であるが無ではない。したがって病気はまったく別の形態でなければならない。別の「生の有り様（allure）」でなければならない。それゆえそこに、現実の核心に、生命的なものの存在論がある。その存在論はわれわれに、不変項に基づいてヴァリエーションを単純な物理学的分析にかけることで生命的なものを取り戻そうとすることを禁じる。この存在論は決してカンギレムの思想から完全に消え去ったりはしない。たとえ、１９６０年代に出現した遺伝情報という強力な思想の影響下で影が薄まるとしても。しかしながらわれわれは生物学的医学との関係における、生命的なものの存在論の地位への問いに、真剣に直面しなければならない。〔それとも〕われわれがこの存在論に到達することができるのは、生物学的医学に背を向けることによってなのであろうか？

2 生理学は同時に病理学ではありえないだろう

§８－ベルクソンの形而上学においては、たとえ直観が一方ではまったく「無際限に拡張される反省」として現出したとしても、記号なしに生命的なものへ直接に到達できると考える誘惑が常にあった。しかし、このようなためらいはもはやフランスの医学－哲学者〔カンギレム〕には不可能である。その哲学はより率直に、より明示的に科学的営為から養分を受け取る学問として現れている。したがって、生命的規範性の分析は、科学的反省に「反対」したり、いや単に、「逸れたり」する形で行われることはできない。こうした姿勢はわれわれにとって中心的な重要性を帯びてはいる。もはや規範性についての思想を、自律的学問としての何ものかにすることは問題ではない。したがってもし、体験に還元できないものとしての生命的なものへのアプローチがカンギレムにおいて進められているのであれば、それは必然的に科学批判に基づいてのことである。哲学がその領域を見いだすことができるのは唯一そこにおいてである。最初決して分野をもっていないところの哲学は、またそれゆえ当然不満、もっといえば永続的な不十全に苛まれているのである。しかし如何にしてそのような反省形態の輪郭をはっきりさせることができるのだろうか？ 哲学は科学の助けを借りて、もはや科学的営みと連絡していくことはできないような或る観点を築き上げることをめざすのだろうか？あるいはむしろ、科学的営みを展開させうるように科学的営みに対して規範的照明を与えるのではないだろうか？ そのことがカンギレムにおいて注目すべき点でありつづけている。その点こそが、彼の哲

学のなかにはおそらくは完全な解を見いだしえない、ある緊張を開くのである。しかし、われわれはそこから面白みと豊かさのすべてを見積もるために注意深くこの点を探ってみよう。

§9 - 糖尿病の例とカンギレムがそれを提示している批判的読解を少々強調しておこう。このフランスの哲学者はクロード・ベルナールの発見の重要性を否定したりはできないだろう。その発見は肝臓のグリコーゲンの機能に関するもので、生体器官――真の化学工場――が、生体が摂取する食糧から受け取る糖を変成する仕方と、この化学的変成とグリコーゲンが筋肉や神経細胞のエネルギー貯蔵所を構成するという考えとの間の連係を可能にする仕方とを証明し、形容し、予測することを可能にするものである。そうした偉大で深遠な発見に逆らって、高血糖や糖尿と、肝臓で精製されたグリコーゲン量の調節とは連係がありうるという事実を疑ったりすることもしない。そうしたパースペクティヴこそが、次にはインシュリンおよびそれに拮抗する肝臓の下垂体から分泌される調節ホルモンの役割の発見に導く。こうした働きはおそらく、生物学的医学における非常に実験的で決定論的なアプローチへの出発点の一つである。器官が身体から摘出された状態で水中でのグリコーゲンの分泌を証明するのに用いる「肝臓洗浄」という有名な実験は、実験的方法の原理を例証するのに十分である。もはや単に観察することのみではなく、生体から要素の一つを切り離すことによって人為的にかき乱し、こうした撹乱が導く変化を定量的なやり方からパラメータ化しようと試みることが重要なのである(NP, 20)。これは決定論的方法でもある。というのもこの場合、その手法は、単純な生化学的方程式の形式で、生産されたグリコーゲンの量にともなって導入されるグルコースと水の分子数とのあいだに直接的な関係を見出すからである。この点について結論すると、肝臓は、したがって単に化学工場の役目を果たすだけではなくその上、調節器官の役目も果たすことははっきりしている。グリコーゲンからスクロースへのこの変成は生体がその貯蔵を糧にしてある短時間生きることができるというパースペクティヴにおいてしか意味をもたない。外部環境の変化にもかかわらず、われわれの体温が恒温を維持するのと同様に、われわれの血中糖量〔比率〕は約一〇〇〇分の三であり続ける。

生理学的恒常性はしたがって単に構造不変性の表現であるのみならず、むしろまさしく機能不変性の表現である。外部環境の変化が何であれ、あらゆる破局的出来事が不在であれば、同一の機能は内部環境においても同一のやり方で遂行されている。ベルナールの立場はしたがって厳密には還元主義的でも物理主義的でもない。彼の立場はむしろ機能主義的である。グリコーゲンの機能は物理 - 化学的交換によるが、その交換に還元されはしないだろう。グリコーゲンの機能は器官特性である。各々の要素特性ではない。

§10 - ベルナールの機能主義の第二の特徴は次のことである。すなわち、決定論的なものの見方はまさに統計的で確率論的な説明形態によってもたらされる。その説明形態にしてみれば、生理学的な恒常性は何らかの平均値を表現し、病気は平均値からの単純な偏差を表現しているという

ことになる。

（4）「生理学を研究することによって、どのように諸器官は変質〔悪化〕するのか、如何なる境界において諸機能は正常状態から逸脱するのかを知るに至ること。」（NP, 32）

したがって「同一性」ではないにしても、少なくとも生理学的諸現象と病理学的諸現象の間に「ある連続性」があるだろう。人口学的方法をとおして、われわれは新たな生物学的単位（entité）に取り組んでいるのだろう。血糖の変動はもはや無視できる単純で些細な撹乱ではなく、その計算が考慮に入れなくてはいけない標準偏差になるだろう。やはり健康と病気という質的に対立する二つの状態の間の量的連係を明確にすることは可能であろう。ヴァリエーションや「異常な」状態はある意味では今や計算の一部を成しているのだろう。分散なき期待値はない。不安定〔ゆらぎ〕なき統計的安定性はない。したがって健康なき病気もまたない。われわれは、フランスの哲学者〔カンギレム〕が科学的理論の新たな形式の寄与や新規性を否定しようとしていたとは一瞬たりとも思わない。〔実際、〕科学的理論は――ある程度までは――生物多様性を引き受けることができるのである。逆に、力学における微分方程式の連続主義的決定論の方は、多様性の限界を示してしまうのである。血中で過度に増した糖量と糖尿病の症状との間に相関がありうるという事実はまさしく新たな説明形式を作り上げる。しかしそれは本当に証明になっているのだろうか？答えは生憎否定的である。すなわちわれわれは実のところ、糖尿病の諸症状（失神、視覚障害、慢性疲労）が生じるごとに、自動的に高血糖症を発見しなくてはいけないとは結論できないのである。高血糖症なき糖尿がありえる。そして逆もありえる。ある意味で逆に、すなわち、リスト化された糖尿病の型のどれかが現れていないとしても、血糖値は増大しうる。もっと先に進もう。もし腎臓が血液に押し流された不純物を濾過するのに大変役立つとしたなら、如何にして血糖値が増加することなしに、尿中に過度の糖がありえることを理解すればよいのか？しかしながらしばし以下のことを認めてみよう。つまり、健康は生理学的恒常性の平均値における生命であろうということと、病気はパラメータ化可能な標準偏差でしかないであろうということをである。根本的で概念的な問題が生じる。それはベルクソンによって一八八九年に突きとめられた、物理学者によって測定された時間と、意識によって生きられた持続とのあいだの関係に関する問題に酷似した問題である。健康は如何にして規範的概念であると説明できるのであろうか？生理学者の言説において結局容認できないことは、平均と標準偏差として生体を取り扱うことではなく、平均を正常状態と考え、標準偏差を病的状態と考えることである。如何なる名辞のもとに、平均的な行動は正常であると考えられるのであろうか。フランスの哲学者〔カンギレム〕がここでベルナールを非難していること、それは概念的な滑りである。その滑りは記述的――さらには説明的――言語活動から規範的言語活動へ如何なる正当化もなしに自らを移行させることである。この滑りと連動して、――前提となる――命題がある。その命題によれば、健康な状態はまた理想的な状態でもある。また、病気はそうした理想から

われわれを引き離すものだろう。このように、学者〔ベルナール〕の言説は単に記述的であるだけでなく、ある価値論（axiologie）に、それだけではなく、素朴な形而上学にすら依存している。この形而上学は、計算の段階、測定の方法の段階では全く理論的に正当化できないものである。そうした素朴なものの考え方においては、われわれが規範としてどころか単純な事象としての病気と健康の出現を理解できないばかりではなく、何もまして病気が取るに足らないもの（*un rien*）として現出してしまうのである。このような考え方は存在論的価値を――あるいはほとんど――もたない。だから著者は非常にベルクソン的な口調でこう結論する。

（5）「医師は客観的病理学を必要としているということはわかるが、対象を消してしまう研究は客観的ではない。」（NP, 49）

§11 - 健康と病気を論じること、それは生理学的恒常性を論じることとは別のことである。というのも、カンギレムにとって第一に、そして根本的に、病気なき健康などないからである。健康はだから、確固とした平衡やゆらぎなき秩序ではありえないだろう。すべての病理学は、こうした仕方で理解された、生理学の問い直しである。病理学はその生理学を立証しない。しかし、それを常時修正する。したがって、病気においてまさに健康は、自己に対して同一的ではないのでなければならない。健康は「自己」、すなわち、その意味が同時に「非自己」においてしか見いだされないような体験をもつ。このように、単に健康が「生きられる」のみならず、生命が規範的「分極」として健康を介して現出するのである（NP, 85,118,130,137）。生命は合致ではなく、自己に対する非合致なのである。生命はだから実体ではありえないだろう。反対に生命は不均質で、有限なものである。というわけで、こうした規範性は「創設される」のである（NP, 77）。この概念の一見唯名論的な使用はまずは、この生命に体験された〔生きられた〕次元は、現象学的であるより実践的〔プラグマティック〕な意味を有するということを表現している。規範性はその存在と行動の間の隔たりを表現する。しかしさらに、分極した生命はやはり――ある種――その非存在に結びつけられる。生命はその関係からしてみればその反対でもある否定へと生きていく。たとえば病気。その反対はもはや単純な逆ではない。それはまたベルクソンにおける物質と生命の飛躍の間の関係に極度に類似している仕方で、生命が内包する矛盾でもある。逆に病気は、単に「突発事 avènement の進行性」として理解可能で説明がつくようなものではない（NP, 49）。生命はむしろ、まさに「出来事の独創性」である（NP, 49）。病気は取るに足らないものなどではない。健康の単純な除去などではない。それはまた別の「生命の有り様」である（NP, 51）。病気とともに、すべては変形し、変成する。単に諸器官の機能がかき乱されるだけでなく、むしろもはや、同じ器官ではなくなっているのである。したがって諸器官はもはや〔以前と〕同じ機能を備えてはいないのである。ここでカンギレムの眼差しの今日的意義を強調しておこう。彼は還元主義的観点に反して、全体主義的観点を選ぶようなことには満足しない。ある意味ではひとは、すでに全体主義的であるベルナールの機能主義について語ることができるだろう。つ

まり、

（6）「しかし、生体においてあらゆる機能は相互依存関係にあり、それらのリズムは調律されている。」（NP, 47）

生命は規範的である。生命はだから「ボトム・アップ」アプローチによっても、「トップ・ダウン」アプローチによっても、説明されえない。生命の音楽はむしろ「ミドル・アウト」である。生命は「諸機能の相互依存関係」やそれらの「調律されたリズム」から生じる。生命は中心が至る所にあり、どこにも周囲がない円のようである。

§12 - だからといって生命の規範性を生物の説明に対立させなければならないのだろうか？カンギレムが〔対立に〕肯定的な答えをしがちであるということを否定しても無駄であろう。おそらくこれは彼の論証の弱点である。たとえ実際に両者を対立させても、自分の原則にもとる行為をすることになる。というのも、完全に自分固有の分野のうちで構成されうる哲学的反省などないからである。価値論的観点からしても、生命の形而上学の視点からしても、規範的なものの分野はしたがって完全に哲学に固有ではないだろう。この大原則を問いなおすことなしに、規範的なものについての基礎づけ的で超越論的なパースペクティヴはありえないだろう。しかしながら、カンギレムの合理主義が真の基盤をそこで見いだすポイント、何よりもまず科学における決定論の擁護にこだわるということに留意しておこう。

（7）「生命は――実際は歴史的に、いつもそうだったわけではないが――科学の対象になる」（NP, 149）。

カンギレムが要求するもの、それは単純にラプラスの「閉じられた決定論」を破棄することである（NP, 65）。それはベルクソンが「極端な機械論」と呼ぶところのものであり、今日の科学認識論者の「物理主義」に行き着くだろうところのものである。もはや単なる「方法の要請」ではなく、まさに度を超した結論づけの最悪なものに基礎をおく、現実についての素朴なものの見方が問題になっているということを見ないわけにはいかないだろう。つまり、世界を単純なシステムであるかのように扱うこと。限られたものと閉じられたものしかないかのように開かれたものを扱うこと、である。しかしながら「限られた」と「制限された」の間の決定的な概念的差異を理解しないこと、シモンドンが少し後になって際だたせるのだが、これこそが物理主義者のひどい誤謬なのである。

§13 - それから次に以下のことに留意しよう。もしカンギレムの生気論がまさに規範的なものと科学的なものの間の対立から養分をえているのだとしたら、その対立は常に科学の立場そのものについて著者が提示している示唆や科学的問題との関係に入っていくことになる。糖尿病というわれわれの例に立ち戻るために、哲学者〔カンギレム〕は彼の著作の

後ろから二番目の章で「斥力的」恒常性と「推進的」恒常性の区別を導入する(NP, 137)。そうして彼は「生命の安定化された有り様についての科学」としての生理学の新たな形式の誕生を禁ずることはない。新たな斥力的恒常性が、堅牢性を守りながらも可塑性を失っているシステムとともに諸規範を変化させる適性と関係していると感じられる。このような可塑性と堅牢性の概念によって生理学的恒常性を特徴づけることはそれゆえ、「腎臓の閾値」(NP, 43)が実在することの確認と関係しうる。その腎臓の閾値はわれわれが糖尿病にかかることなしに高い血糖値をもちうることを説明してくれる。それはあたかも、海に身を横たえながらも、しかしそれでも流れない帆船のようである。それに対して、船が流れているときは、もはやパラメータ化可能で数量化可能な自然的出来事は問題ではない。むしろ問題なのは、数量化の手順において痕跡を見いだすことが可能になるに違いないカタストロフィーである。それは単純な現象ではなく、病気とともに出現する現象の新たな秩序なのである。可塑的なものと壊滅的なものとのそうした差異は決定論的かつ／もしくは統計的な計算に基礎づけられた旧来の医学生理学にとっては如何なる意味ももたなかった。カンギレムは新たな動的生理学の空間を描き出す。その生理学はその空間を通して一挙に何らかの新たな秩序を得ることを可能にするであろう。

結論

§15 - 哲学は時代の申し子である。だれもシステム生物学を発明しなかったカンギレムをとがめることはできない。むしろシステム生物学を予期していたことが称賛されなければならない。多くの強情な精神が、いまなお科学の世界と今日の科学認識論の世界のなかでの運動を結びつけるのをためらう状況にあって、それを予期していたのである。フランスの哲学者〔カンギレム〕は否定しようもなく生気論者である。彼がそれを願うことで要請はしているが決して名づけることのない生命的規範性の形而上学が、哲学と科学の間の有名な「境界区分線」の一つを導入するところの意味で、生気論者である。彼の思想における初発の運動はすべて、むしろ哲学的反省を決して自らに対して一致することのない超克の思想にすることであるという、そこのところが〔生気論者〕である。そしてそれゆえ本質的に、その初発の運動が構成されるために実証的学問を必要とするというところもそうである。しかしわれわれは哲学の分野にベルクソンに比しても根本的な前進が生じているのを見ている。まさにカンギレム固有の生命の概念があるのだ。しかし、その概念はもはや実体論的意味を有してはいない。少なくとも『正常と異常』では有していない。生命は実際――思い出したいのだが――その存在とその行動の間の不一致という単純な意味で規範的なのではない。すでに非常に重要な第一の点かもしれない。というのもそのことが、生命はこの世界のものであり、物理学的世界のなかにある、もうひとつの別の世界などではないということを、はっきりさせられるからである。生命は極性である。不一致である。そして、その存在とその非存在の間の侵食(*empiétement*)である。その非存在は存在価値を有する。それは単なる取るに足らないもの〔無〕ではない。こうして、このとてもあいまいな

テーゼが、「二つの秩序」というベルクソン的形而上学と、おそらく「力への意志」というニーチェ的概念からも帰結しているということをよく理解することができる。規範性が純粋他性であるような生命だけでなく、純粋他性としての生命はまた、他者存在とは別のものである。生命は、規範性として純粋な他性であるだけでなく、他の存在とも別のものでもある。「非生命」はもはや生命にとって無ではなく、完全な他者である。われわれが生命の充溢（plénitude）は実体的ではないと結論しうるのはこのようにしてである。それは開かれた、未完成の充溢である。その充溢は絶え間なく修正されるべきものである。生命はまさしく一つの世界である。しかしそれは実体としての世界ではなく、次元としての世界でしかない。生命は、著しく逆説的で前代未聞の命題をわれわれへとさらに少しだけ歩み寄らせる。いうなれば、それは単に世界における諸々の出来事なのではなく、まさしく常に同時に一つの出来事である世界そのものである。以下を断言しておこう。卓越した意味での形而上学であるこの命題をめぐって、一人の愛人をめぐってのように、ベルクソンからカンギレムを通ってシモンドンとドゥルーズにいたるまでの二〇世紀フランス思想の力強い流れがまわっている。